

そもそも農業や漁業は儲かってもらっては困るという社会の仕組みになっているのではないだろうか。その仕組みはデモクラシーである。かなり真面目にそう思っているが、特段、分析的に考えたわけではない。

農業や漁業が生産しているのは、ほとんどが食料品で生活必需品である。生活必需品にかかるコストをできるだけ安くしたい。そうでなければ、社会が不安や不満が高まり、社会が不安定になって革命がおこる。為政者はいつもそう考えるし、主権者である国民もまたそう考える。食料品の価格を安く据え置くのは善政である。しかし、そうなれば、当然、農業者や漁業者の収入は圧迫される。それでは、農業や漁業が持たないので、農業者や漁業者の生活を税金で支えようとする。いわゆる農業補助金・漁業補助金である。形は様々だが、すべての国が何らかの形で、農業補助金・漁業補助金を出して、農業・漁業を支えている。WTOは健全な競争と貿易の利益の確保のために、輸出補助金を禁止し、農業補助金・漁業補助金を削減しようとしているが。様々な形に形を変えながら、農業補助・漁業補助は行われる。そうでなければ、低い必需品の価格と農家・漁家の生活は同時に成立しない。いっそ、寡占化を進め、経営規模を大きくして、経営が成り立つ少数の農業者・漁業者を残せばよいという考えがないわけではない。しかし、それはそれで大量の離農者・離漁業者を社会のどこかに収容しなければならないので、そのコストも考えなくてはならない。それなら、そこそこ生きられるように、補助金をまく方が安いかもしれない。実際には、そんなに補助金は支出されていないという反論もあるが、補助金と言う言い方をしなくても、様々な名目で金を出せる。要は、どういう名目を立てるか、どういう言い訳をするかだろう。そんなに補助金は出していないというならば、それはそれで結構なことで、バランスが取れているので、今のバランスは崩せない。

この議論は、産業人口比と関係しているので、農業者・漁業者が圧倒的多数ならば状況は違うという意見もあり得る。しかし、国の生産のほとんどが農業あるいは漁業というくにはかなり特殊な国だろうし、それが、小国の場合、内需だけで経済は成り立たない。貿易政策的に一次産品の価格を引き下げることにはしても、上げることはしないだろう。大国の場合には成り立つかもしれない。広大な土地で大量の農産物が作られ、高価格で国内的に取引される。しかし、そうなると、工業製品は供給量が減るので、希少性の原理で、工業製品の価格は高騰し、やはり、第一次産品の価格は相対的に低くなるだろう。

何が言いたいのかと言うと、世の中とはそういうものだということ。本当に必要なものは、安く潤沢に供給されなければならない。人々が求めているのはそういうことであり、それを実現するのが「善政」ということになる。

ということになると、漁業者には救いがないではないかということになる。確かにそう
で、上に述べたような屁理屈をこねまわしていると、いつも同じような結論しか出ない。
もう気が付かれたであろう。前提条件が同じだから、同じ結論にしかならない。ここは、
一つ前提条件を変えてしまえば良い。つまり、本当に必要で大量に供給する必要があるも

のを生産するという考えをやめればよいだけのことである。あまり役に立たない、どうでも良いようなものを作ればよい。そんなもの売れないだろうと思うかもしれないが、私たちの生活には、全く役に立たないどうでも良いもので満ち溢れている。古くは、坊主や牧師の説教である。あんなもの何の役にも立たない。ただ何となくありがたそうだから、ありがたいものだと思ってお布施や献金をする。神主の祝詞などになると、いったい何のためにやっているのかさえ分からないが、それでとりあえず問題ない。AKB48などと言うのも、実際、どこが良いのかわからないというところが、適当な近づきやすさで良いのだろう。新聞、これが全く役に立たないどうでも良い紙切れだということは常識だろう。最近ではちり紙交換の役にも立たないから購読者が激減している。読んでいたほうが教養人に見えるというただそれだけの理由で昔はありがたがられていた。最近では、新聞を読んでいると教養がない人に見える。新聞の論説の質が下がったという人がいるが、そうではない。最初から、ごみほども役に立たないものだった。まあ、新聞だけの罪ではなくて、文化というのがそういうものだったのだ。言葉をつかった一種の芸人とか役者のようなものだから、流行り廃りだけがあってもともと内容なんかない。大学はどうなんだろう。そういえば、昔、すぐ役に立つような研究をしてはいけないと習ったな。遠い将来に役に立つかどうかなどはしよせんわからない。ありがたそうに見えるけど、大学の研究のほとんどは、本当は何の効能もないどうでもよいしろものなのだろう。当たり障りがなくて、邪魔にならず、何となく受けが良い。そういうテレビ番組にスポンサーがつく。ようは、その番組の情報が広く人に共有されるからだろう。

成功するためには、どうしても大量に必要で人の役に立つようなものを作ってはいけないのだ。特に少量生産の場合はそうなる。大量生産ならば、生産効率を上げて、生産効率の勝負に持ち込んで、薄利多売で利益を上げることが可能だが、少量生産はそうはいかない。良くわからないが、何となくありがたそうなものを作らなくてははいけない。少量生産には少量生産なりの勝負の仕方があるのだと思う。漁業に関しては沿岸漁業がそうだろう。そこに行ったこともないし、どんなところか知らないが、その産物だというのが、なんだかわからないがとにかくありがたいことだというようなものを作らなければならない。それには、生産者自身がその演出に積極的に協力して演じなければならないのだ。そしてそのありがたみを徹底して維持しなければいけない。あなたは、関サバの関がどこか知っていますか。関サバの定義というか、何をもちいて関サバとするのか知っていますか。関サバが何となくありがたいものだと思っているだけではないですか。そう、それで良いのです。文化とはそういうもので、そういう頼りないところを何となく楽しめば良いのです。それを演出できればもうかる漁業になるのだと思います。

漁師学校を作って、漁師の数を増やそうとしている人。そんなことをしても意味ありません。漁業がもっと衰退します。駄目です。文化を演出し演じられる漁師を作りましょう。

と言う考え方から、この文章もそうなのだが、筆者は、話の脈絡がなく、なんだか意味が解らないが、何となくありがたい。というような講義を心がけている。